

論文の内容の要旨

論文題目 米国における教師の「専門家共同体」の形成と展開
—ランド研究を起点とする学校改革研究の系譜—
氏 名 鈴木 悠太

本研究の目的は、米国における教師の「専門家共同体」の形成と展開を、「ランド・変革の担い手研究」（1973-1977年）を起点とする学校改革研究の系譜として描き出すことにある。先行研究において「ランド・変革の担い手研究」を起点とする学校改革研究は、その性格を反映し、教育政策研究や教師教育研究といった異なる領域に分かれて検討されてきた。それに対し本研究は、1970年代から2000年代にかけて展開した学校改革研究の一つの系譜として描出することで、概念と実践の展開を考察する試みである（3部7章構成）。

第I部は、1970年代から1980年代における「ランド・変革の担い手研究」を起点とする学校改革研究の形成を主題とした。

第1章では、ミルブリィ・マクロフリンを中核的メンバーとする「ランド・変革の担い手研究」の展開を検討した。「初等中等教育法タイトルⅢ」による学校改革の展開を中心に跡づけていたマクロフリンは、革新的な実践を追求する学校改革の多様な「変革の担い手」の経験を主題化し、各々に固有の視点から学校改革に接近していた。「ランド・変革の担い手研究」は、改革の「最善の実践例」の「忠実な実施」を追求する政策決定者に再考を迫る「相互適応」の概念を提起し、希少な改革の成功を「制度的状況」と「実践」の双方の適合的な過程として特徴づけた。さらに「ランド・変革の担い手研究」は、その重要性が認識され始めていた「スタッフ開発」にも再考を迫り、「スタッフ開発」を学校改革の中心的課題として位置づけ、学区と学校の組織的な文脈における教師の「専門家の学習」を強調した。「ランド・変革の担い手研究」の成立は、革新的な実践を追求する学校改革を

公立学校システムにおいて実現させる可能性と条件を探究する学校改革研究の成立を意味していた。

第2章では、ハーバード大学の同門であるリチャード・エルモアとマクロフリンによるランド研究所の共同レポート『愚直な仕事』（1988年）を検討した。エルモアとマクロフリンの独自性は、「政策」「行政」「実践（教師）」の3つの「変革の担い手」の視点から学校改革を描き出し、その3者に相互に依存する「愚直な仕事」として学校改革を性格づけることにあった。この性格づけは、1980年代の「卓越性」に向けた「効率性」を追求する州政府主導の改革や、「学校を改善の単位とする」草の根の改革の展開に対して異彩を放っていた。『愚直な仕事』の公刊を踏まえマクロフリンは、1990年代の新たな学校改革研究を準備していた。マクロフリンは、「ランド・変革の担い手研究」の再検討に着手し、学校改革の「実現可能性の追求」を強調し、さらに、「政策」「行政」「実践（教師）」のうち「改革の導き手」としての「教師の視点」から学校改革を探求することの徹底を掲げた。

第Ⅱ部は、1980年代から1990年代における教師の「同僚性」の形成と展開を主題とした。

第3章では、1980年代における教師の「同僚性」の概念の形成と展開を検討した。1982年、「ランド・変革の担い手研究」の成果を背景とするジュディス・リトルの学校改革研究により、教師の「同僚性と実験の規範」の概念が提起された。「同僚性と実験の規範」が最も発達しているとリトルが同定した学校（「完全習得学習」のパイロット・スクール）は、校長が「ランド・変革の担い手研究」の報告書を読み込んだことに直接的に支えられた改革であった。リトルの「同僚性」の概念は、1980年代に広く教育関係者の注目を集め、「スタッフ開発」を推進する中心的な概念として普及した。しかし、「同僚性」の概念の普及は両義的であった。「作られた同僚性」の概念を提起したアンディ・ハーグリーブズや「自立的職人モデル」を提起したマイケル・ヒューバーマンらによる「同僚性」の批判の系譜は、教育行政のトップ・ダウンの改革による「同僚性」の普及への批判を展開した。他方、リトルは「同僚性」を追求する努力を続け、その成果は1990年の論文に結実した。そこでリトルは、自ら提起した「同僚性」の概念を、「概念としては曖昧で、思想としては楽観的である」とし、以後「同僚性」の概念の積極的な使用を断念する。

第4章では、「同僚性」の概念をめぐるオーストラリア教育学会誌上の論争（1999年）を検討した。教師の「同僚性」の概念の普及は、研究と実践の国際的な展開へと連なっていた。この論争の口火を切ったマイケル・フィールドイングの「ラディカルな同僚性」の概念には、ハーグリーブズとリトルから痛烈な批判が寄せられた。注目されたのは、フィールドイングへの反論においてリトルが、1990年代の学校改革研究の展開である教師の「専門家共同体」の議論がフィールドイングに欠落していることを批判することであった。「同僚性」の新たな研究の展開は、マクロフリンを中心とする教師の「専門家共同体」の形成と展開に見出されることになる。

第Ⅲ部では、1990年代から2000年代における教師の「専門家共同体」の形成と展開を主題とした。

第 5 章では、マクロフリンの研究の系譜における「専門家共同体」の形成と展開を検討した。1987 年にマクロフリンを代表とするスタンフォード大学「中等学校の教職の文脈に関する研究センター (CRC)」が開設され、マクロフリンは「ランド・変革の担い手研究」から引き継がれた課題に着手した。スタンフォード CRC の「第一世代」の研究 (1980 年代後半から 1990 年代にかけて) は、州政府主導の改革が展開される中で教職の「文脈」を中心概念とする学校改革研究であり、その「中核的研究」はカリフォルニア州及びミシガン州の高校改革研究であった。

1993 年にスタンフォード CRC 研究が提起した教師の「専門家共同体」の概念は、「革新と学習の規範」「省察、フィードバック、問題解決の能力」「民主的な意思決定」「全ての生徒に対する有効な授業実践の開発」によって性格づけられる高校の「教科部」の実践に基づく概念であった。「専門家共同体」は、家庭の機能不全、仲間からの圧力、薬物の乱用、早期の妊娠、退学、地域社会からの支援の欠如といった重荷を抱えざるを得ない「今日の生徒」に対して、革新的な授業実践（「理解のための授業」）を追求する教職の「文脈」としてマクロフリンらが同定した概念であり、学校を捉える新たな「隠喩」としてマクロフリンらによる政策提言の中心に据えられた。

「中核的研究」の成果の定式化は、マクロフリンとジョーン・タルバートによる『専門家共同体と高校教師の仕事』（2001 年）において示された。「中核的研究」の成果は、「教師の視点」からの学校改革研究の成果であり、授業の 3 類型（「従来の実践の実行」「期待と基準を下げる」「学習者が参加する革新」）を中心とし、教師共同体の 3 類型（「弱い教師共同体」「強力な伝統的共同体」「強力な教師の学習共同体」）、教職キャリアの 3 類型（「停滞もしくは下降しつつあるキャリア」「相互に異なる（不平等な）キャリア」「共有され進展するキャリア」）の連関を示していた。さらに教職の「文脈」の概念は、校長のリーダーシップ、学区、州の政策を射程に収めていた。

第 6 章では、リトルの研究の系譜における「専門家共同体」の形成と展開を検討した。1990 年代スタンフォード CRC 研究に参画していたリトルは、1990 年代後半から 2000 年代にかけてカリフォルニア大学バークレー校を中心とする新たな学校改革研究を展開した。リトルは、「専門家共同体」の実践の普及を踏まえ、「専門家共同体」に存する「楽観的な前提」を指摘し、教師の「専門家のディスコース」を探究する研究に着手した。リトルの指導生であったイラナ・ホーンは、授業改革のディスコース（「グループで学ぶに値する課題」）を発達させていた高校の実践及び、改革の「共通言語」（「少なく学ぶことは多くを学ぶこと」）の意味が空洞化し教師の「専門家のディスコース」の停滞を示す高校の実践に迫っていた。同じくリトルの指導生であったマーニー・カーリーは、「クリティカル・フレンズ・グループ」の方略（「プロトコル」の開発）に即し学校規模の改革を進めてきた高校の実践の展開に迫っていた。

第 7 章では、教師の「専門家共同体」の新たな展開を主題とし、スタンフォード大学を中心とする研究の系譜を検討した。1990 年代は、「新しい政策決定者」による学校改革が進

展していた（「エッセンシャル・スクール連盟」や「ベイ・エリア学校改革協同機構（BASRC）」など）。スタンフォード CRC の「第二世代」においても、革新的な実践を追求する学校改革方略の探究は一貫していた。BASRC は、学区によらない学校間の改革のネットワークにより、生徒の学業達成度の格差を埋める「探究のサイクル」を中核とする改革であった。マクロフリンらは、この「探究のサイクル」を超える教師の協同的活動を強調し、「教師の学習共同体」の「発達段階」及び「移行の課題」の解明に着手していた。「新たな政策決定者」による学校改革の多様な展開においてマクロフリンらは、教育行政を含む様々な「変革の担い手」による改革の展開を射程に収める政策提言を行い続けていた（「変革の単位としての学区」）。

新しい世代の研究者であるジョエル・ウエストハイマーは、教師の「専門家共同体」の「イデオロギー」を主題化し（「自由主義」と「集団主義」）、スタンフォード CRC の第二世代の研究者であるベティー・アキンスティンは、「専門家共同体」における「葛藤」をめぐる教師への質問紙調査の結果とは対照的な実践の特質に迫った。同じく第二世代の研究者であるシンシア・コバーンは、「専門家共同体」における「政策と実践の媒介過程」の解明に着手し、カリフォルニア州の教育政策の史的展開を踏まえ、BASRC による改革過程に迫った。コバーンの研究は、「専門家共同体」研究の新たな展開であると同時に、州政府及び「新たな政策決定者」による改革の展開を教育実践において射程に収める教育政策実施研究の新しい展開を示す研究であった。